1 近代日本の哲学者

▶ pp.194～195

純粋経験 ―西田幾多郎

経験するというのは事実其儘（そのまま）に知るの意である。全く自己の細工を棄（す）てて，事実に従うて知るのである。純粋というのは，普通に経験といって居る者もその実は何らかの思想を交えて居るから，毫（ごう）も思慮分別を加えない，真に経験其儘の状態をいうのである。例えば，色を見，音を聞く刹那（せつな），未だこれが外物の作用であるとか，我がこれを感じて居るとかいうような考のないのみならず，この色，この音は何であるという判断すら加わらない前をいうのである。それで純粋経験は直接経験と同一である。自己の意識状態を直下（じか）に経験した時，未だ主もなく客もない，知識とその対象とが全く合一して居る。これが経験の最醇（さいじゅん）なる者である。

（『善の研究』第１編第１章　岩波文庫）

確実な知識

さらば疑うにも疑い様のない直接の知識とは何であるか。そはただ我々の直覚的経験の事実即（すなわ）ち意識現象についての知識あるのみである。現前の意識現象とこれを意識するということとは直に同一であって，その間に主観と客観とを分つこともできない。事実と認識の間に一毫（いちごう）の間隙（かんげき）がない。真に疑うに疑い様がないのである。

（第２編第１章）

真の実在

純粋経験においては未（いま）だ知情意（ちじょうい）の分離なく，唯一の活動である様に，また未だ主観客観の対立もない。主観客観の対立は我々の思惟（しい）の要求より出でくるので，直接経験の事実ではない。直接経験の上においてはただ独立自全の一事実あるのみである，見る主観もなければ見らるる客観もない。恰（あたか）も我々が美妙なる音楽に心を奪われ，物我相忘れ，天地ただ嘹喨（りゅうりょう）たる一楽声のみなるが如（ごと）く，この刹那（せつな）いわゆる真実在が現前して居る。これを空気の振動であるとか，自分がこれを聴いて居るとかいう考は，我々がこの実在の真景を離れて反省し思惟するに由（よ）って起ってくるので，この時我々は已（すで）に真実在を離れて居るのである。

（第２編第３章）

禅と絶対矛盾的自己同一

禅と云ふのは，多くの人の考へる如（ごと）き神秘主義ではない。見性（けんしょう）と云ふことは，深く我々の自己の根柢（こんてい）に徹することである。我々の自己は絶対者の自己否定として成立するのである。絶対的一者の自己否定的に，即（すなわ）ち個物的多として，我々の自己が成立するのである。故に我々の自己は根柢的には自己矛盾的存在である。自己が自己自身を知る自覚と云ふことその事が，自己矛盾である。故に我々の自己は．何処までも自己の底に自己を越えたものに於（おい）て自己を有（も）つ，自己否定に於て自己自身を肯定するのである。かゝる矛盾的自己同一の根柢に徹することを，見性と云ふのである。

（『場所的論理と宗教的世界観』近代日本思想体系 11
『西田幾多郎集』筑摩書房）

人間存在 ―和辻哲郎

我々は人間の概念を，世の中自身であるとともにまた世の中における人であると規定した。今や右のごとく世間・世の中の概念が定まるとともに，我々は人間のこの側面を人間の世間性として言い現わすことにする。それに対して他の側面は人間の個人性と呼ばるべきであろう。人間存在はこの両性格の統一である。それは行為的連関として共同態でありつつ，しかもその行為的連関が個人の行為として行なわれる。それが人間存在の構造であり，従ってこの存在の